

世田谷村日記

石山修武

三月十五日

十時過研究室。今朝は世田谷村にて八時に九州の忍田さんと浄水の家の取り壊しの件で連絡をとり、少々あわただしかった。結城さんが授賞式で上京するついでに研究室に立寄りというので少し早く研究室に出掛けた。十二時前、結城さん来室。スタッフ及び院生に会わせる。結城さんの人柄に接しさせたいと考えたからサンドイッチの昼食を挟みながら、結城レクチャーをスタッフに聞かせる。十四時半迄。もう今日の仕事は終わったと考えたが、ずるずると居残り、打合わせ等をこなした。ウェブサイト用の原稿を四本書く。十九時過迄。二〇時新大久保駅前近江屋でビールを一杯飲んで世田谷村に戻る。只今、二十一時過、京王線車中。広島の木本君に依頼している厚生館の「花を持つ子供像」のオペレーションを具体的にしないと間に合わなくなるなど、いささか不安になる。木本君のスタディーの為に少し計りの意見と、幾つか仏像の写真を送る。しかし、木本君にも、私にも初めての彫刻依頼の仕事なので、難しい。でも、何とかする積もり。木本君は不眠不休になるであろう。二十一時半世田谷村に戻る。TVニュース報道ステーションを見ていたら足立区の手動の踏切で二人の婦人が死亡という報道がされている。今時、手動の踏切があったという驚きと、やはり人間は誤りを必ず起こすという原理を知った。手動の踏切は全国で今や六十七カ所残っているだけらしい。手動で踏切を開けてしまった人間を責めるのは当り前の事であるうが、システムとしては大都市に人間の手で開け閉めする踏切を

残していた管理体制を責める方が理であろうと思う。しかし、人間二人の命の損失は余りにも大きい。今日、ウェブサイトに佐賀での早稲田バウハウス、ワークショップの参加者だった黒田さんの追悼文を掲載したばかりなので一層それを痛感する。

三月十六日

深夜三時四〇分ノコノコ起きて、結城さんから貰った「小さな村の『希望』を旅する」農文協読みふける。

東京の自分の家を世田谷村と名付けたのは間違いはなかった、と結城の淡々とした文章を読みながら思う。村と名付けた直観を土台に、たった一軒からの村づくりを具体化するつもり。私には結城のように東北の小さな村を六〇〇も歩き廻る気力も体力も無いが、結城から学ぶ時間は残されている。九時四〇分国分寺〇邸メンテナンス。業者と打合わせ。十五時二〇分迄。研究室に向かう。十六時半研究室。十九時迄打合わせ。二十一時世田谷村に戻る。